

## 和刻本仏書に見る漢籍受容

### ——『大明仁孝皇后勸善書』の展開とその翻訳に注目して——

木村 迪子

近世は出版文化の花開いた時代であり、多くの書物が出版され人々に享受された。大陸から伝来した書物もまた、はじめは古活字版が、そして訓点を付した整版が和刻本として板行されるようになる。

近世前期に板行された書物の大部分がそうであったのと同様に、和刻本もまた仏書がその多数を占めた。発表者は近世前期における和刻本仏書の受容と展開の解明が近世仏教、更には近世文化全体の正確な把握にとって重要なだけではなく、大陸文化受容という国際的研究の観点からも以後の研究に有用であると考え、これに取り組んでいる。

本発表では近世前期に板行された和刻本の内、寛永期（1624－45）に古活字版が板行された明代成立の善書である『大明仁孝皇后勸善書』（20巻、1407成、以下『勸善書』）に注目して、近世期における和刻本仏書の受容と展開を明らかにする。

『勸善書』は我が国においては寛永期に古活字版『大明仁孝皇后勸善書抜萃』（5巻）が、そして寛文5年（1665）、訓点を付した覆刻整版が伝播した。更に享保15年（1730）、翻訳書である『大明仁孝皇后勸善書錦鱗鈔』（7巻、来儀堂鳳瑞）が上梓される。

通説的に儒教を基底として三教一致を説いた善書の一である『勸善書』であるが、発表者における調査の結果、ダイジェスト版というべき『勸善書抜萃』・翻訳本『勸善書錦鱗鈔』ともにその板行には仏教——恐らく日蓮宗僧侶——が関与していたことが判明した。近世以前から既に日蓮宗内において『勸善書』が読まれていただけではなく、和刻本『勸善書抜萃』における抄出作業が、主に法華経功德譚に注目して行われてきたことも明らかになったのである。そして翻訳である『勸善書錦鱗鈔』の内容は単純には抄出本に基づいていなかった。

上述した『勸善書』の展開は、漢籍が僧侶の読み物として我が国で受容されただけではなく、民衆勸化のためのツールとしても活用されたという点において、漢籍受容の好例と見なせるだろう。

## The Reception of Chinese Works in Japan-Printed Buddhist Texts: The Development and Translation of *Empress Xiaocheng's Poetic Justice*

Kimura Michiko

The early modern period in Japan was a time in which publishing culture flourished, and the books produced then enjoyed an avid readership. Texts introduced from China and Korea, too, came to be re-printed in Japan domestically, first in “old moveable-type editions” (古活字版), and later in woodblock-printed editions (整版) with glosses added.

Just as most of the books published in the early modern period were dominated by Buddhist texts, such Japanese re-printings also adhered to this tendency. I believe that the elucidation of the reception and development of Japan-reprinted Buddhist texts in the early modern period is not only important for an accurate understanding of modern Buddhism and modern culture as a whole, but is also important from the perspective of international research on the reception of continental culture in Japan. I have engaged in this field because I also believe it is useful for international Japanese studies.

In this presentation, among the Japan-reprinted books that were published in the early modern period, I would like to focus on *Empress Xiaocheng's Poetic Justice* 大明仁孝皇后勸善書 (20 vols., completed in 1407, hereafter *Poetic Justice*), which is a book about morality written during the Ming dynasty that was printed in Japan in old moveable-type during the Kan'ei 寛永 era (1624-45). By doing so, I will be able to clarify the reception and development of Japan-printed Buddhist texts during the early modern period.

In Japan, *Poetic Justice* circulated during the Kan'ei era in the old moveable-type edition *Excerpts from Empress Xiaocheng's Poetic Justice* 大明仁孝皇后勸善書拔萃 (5 vols., hereafter *Excerpts*). This was then re-carved into a woodblock-printed edition, with glosses, that was published in Kanbun 寛文 5 (1665). Furthermore, in Kyōhō 享保 15 (1730), a translation was published titled *Empress Xiaocheng's Poetic Justice in Brocade Scales* 太明仁孝皇后勸善書錦鱗鈔 (7 vols., pub. by Raigidō hōzui 来儀堂鳳瑞, hereafter *Brocade Scales*).

*Poetic Justice* is generally held to be a book about morality that preached the unification of the three religions (三教一致) based on Confucianism. But as a result of research by the presenter, it has become clear that in the cases of both the digest-edition *Excerpts* and the translation *Brocade Scales*, publication came about through Buddhist involvement—probably that of Nichiren sect (日蓮宗) monks. It has also become clear not only that *Poetic Justice* was being read among the Nichiren sect already before the early modern period, but that even the selection process behind the Japan-printed *Excerpts* version was carried out with reference to the Lotus Sutra (法華經). Moreover, it is clear that the content of the *Brocade Scales* translation was not based in a simple sense merely on material excerpted from the original text.

The development of the above-mentioned *Poetic Justice* can be regarded as a good example of the reception of Chinese texts in Japan, showing that in addition to being study material for monks, such Chinese texts were also important tools for the popularization of Buddhism.

## 和刻本仏書に見る漢籍受容

### —『大明仁孝皇后勸善書』の展開とその翻訳に注目して—

木村 迪子／日本学術振興会特別研究員（PD）

近世は出版文化の花開いた時代であり、多くの書物が出版され人々に享受された。大陸から伝来した書物もまた、はじめは古活字版が、ついで訓点を付した整版が和刻本として板行されるようになる。その内の一に、明代（1368－1644）成立の善書『大明<sup>だいみん</sup>仁<sup>じん</sup>孝<sup>こう</sup>皇后<sup>こうごう</sup>勸善書<sup>かんぜんしよ</sup>』（1407 刊、以下『勸善書』）がある。本書は 20 巻という大部の漢籍であって、巻頭に儒教・仏教（本文中には「釈」）・道教の三教の経典から抜書した「嘉言」を掲げ、次にいくつかの物語を収録する体裁を採る。

『勸善書』の日本における受容について、最初期の言及を酒井忠夫<sup>1</sup>に、更にそのまとまった論考を黄昭淵、花田富士夫に求めうる。黄は本書の流布状況について、「江戸初期に大量に流入された善書のなかで、『勸善書』がある。善書の中で『廸吉録』は早くから注目されたが『勸善書』はそれほど注目されなかった。<sup>2</sup>」と述べ、伽婢子系怪談集に本書が影響を与えた事実を指摘しつつも、直接的な受容を疑問視する。花田もまた『勸善書』が日本近世における仏教因縁譚に与えた影響を「源流としての位置づけ<sup>3</sup>」にとどまると述べる。

単純に考えれば本書の流布には最も入手が容易な和刻本が大きく貢献したと見なせるが、黄の指摘するように近世期の出版物には『抜萃』のみを参照したとは言い難い『勸善書』利用例が頻出しており、後代における『抜萃』の影響力は低く見積もらざるを得ない。

なぜ『勸善書』の日本における受容は和刻本ではなく別の漢籍を介在する必要があったのか。この疑問を解決する上で注目すべきは、先行研究において、酒井・黄・花田いずれも寛文 3 年（1663）版にのみ言及している点であろう。実は当該本は寛永年間（1624－45）に版行された古活字版『大明仁孝皇后勸善書<sup>ぼっすい</sup> 抜萃』（5 巻、以下『抜萃』）を西田勝兵衛が覆刻整版として出版したものだった<sup>4</sup>。

---

<sup>1</sup> 酒井忠夫『中国善書の研究』（弘文堂、1960）。

<sup>2</sup> 黄昭淵『中国善書の受容と怪談・奇談の展開—仮名草子・浮世草子を中心に—』（博士論文、早稲田大学、1999）

<sup>3</sup> 花田富士夫「近世初期三教思想の一資料『勸善書』に関して（2）」（『教養・文化論集』7 号、ノースアジア大学総合研究センター教養・文化研究所、2012）。

<sup>4</sup> 古活字版『抜萃』への言及は唯一、川瀬一馬『増補 古活字版之研究』（日本古書籍商協会、1967）にのみ見出せる。

先行研究に看過されてきた古活字版『拔萃』は関西大学図書館に1点、巻一のための端本ではあるが、大正大学附属図書館に1点、計2点が確認できる。完本である関西大学図書館所蔵本には『拔萃』編者・日統（？－1579）の奥書が附されており、「此書未流布」と、また日統による抄出本を「聊莫及他見」ということが記される。奥書からは少なくとも日統がこれを書写した永禄元年（1558）当時すでに『勸善書』が日本に伝来していたこと、しかるに本書は当該寺院に秘蔵されていたのであって巷間に流布していない、つまりその原典が容易に入手できるわけではなかった可能性が高いことが明らかである。

更に日統は当代に知れた日蓮宗学僧であった。また『勸善書』が所蔵されていた和泉国（現大阪府堺市）頂源寺は天文13年（1533）、日蓮宗僧侶・日祝（1427－1513）により創建された日蓮宗寺院であり、当時はその学問所として機能していた。こうした背景からは『拔萃』が日蓮宗に縁の深いテキストであった可能性が示唆される。

『拔萃』と日蓮宗との関係性はその抄出態度からも推察しうる。『拔萃』が『勸善書』を均一に抄出していないことは各巻毎の抄出話数が大きく異なることから指摘可能だ。例えば本書は『勸善書』巻之十二から36話を抄出するも、巻之八からは僅か1話しか採らない。こうした不均衡の理由を解明すべく『勸善書』巻之八を閲したところ、全130話の内、108話が金剛經関係譚であることが判明した。これに注目して更に巻之七にも目を向けてみると、当該巻からの抄出は全10話中7話が法華經功德譚であった。再び巻之八から唯一抄出された1話を振り返ってみると、その内容は金剛經と法華經の両經典を尊ぶものである。上記からは日統は金剛經功德譚の抄出を控える一方で法華經功德譚についてはこれを積極的に行ったことが判明した。偏重的抄出態度は日統が日蓮宗僧侶であり、また日蓮宗が法華宗とも言う様に、法華經を最重要視する点をその理由の一に推定できよう。

三教一致のテキストとして成立した『勸善書』は中世期に日本に伝来し、その一が日蓮宗寺院に所蔵されて日蓮宗僧侶により意図的に抄出されたことで、当該宗派の思想をある程度反映したテキスト——『拔萃』——へと変容したと目せる。三教一致を標榜しつつもその実、仏教に偏重したテキストである『拔萃』はこれを直接的に用いるには当時の知識人をして聊か飽き足らぬものがあつたのではないか。基本的に彼らは最新の大陸思想の摂取を求めて『勸善書』の丁を繰ったのであろうから、『拔萃』に頻出する法華經功德譚といった仏教的要素の強い物語では彼らの要求は満たせなかったと考えられる。『勸善書』を利用した近世類書などにしばしば『拔萃』に拠らないテキストが含まれるのは上述の背景を指摘できよう。更に、奥書に「聊莫及他見」とあるものを版行する矛盾を書肆が忌避した

か、寛文3年刊覆刻整版に日統の奥書が削除されたことで、以後の読者の大半が現在に至るまで『拔萃』が日蓮宗由来の抄出本であることを知る術を失ってしまったことが、当該問題の露見を困難にしたと考えられる。

一方で、『拔萃』を積極的に利用したと見なせる例もある。享保15年(1730)に板行された『勸善書』の翻訳書・『<sup>かんぜんしよきんりんしやう</sup>勸善書錦鱗鈔』(7巻、以下『錦鱗鈔』)である。本書は内容のほぼ全てが『拔萃』と重複することから、翻訳にあたっては『拔萃』を踏襲したと考えられる。『錦鱗鈔』の著者は序文に「来儀堂鳳瑞<sup>5</sup>」とする。序文にはまた鳳瑞が「平俗勸化ノ一助」のために本書を記したと述べるが、注目すべきは「勸化」の語である。

近世期に多く板行された民衆教化のためのテキストである「勸化本」について、後小路薫はその嚆矢を日乾の『宗門綱格』(1602刊)に比定する<sup>6</sup>。しかし、およそ17世紀末頃から陸続と板行され始めた浅井了意の『善悪因果経<sup>じきげ</sup>直解』(1666刊)をはじめとする<sup>くすい</sup>鼓吹物、その影響を大きく受けた勸化本の作者は浄土宗ならびに浄土真宗関係者がその大半を占めていた。実際、勸化ということばに引かれて、『国書総目録』には本書を真宗のテキストとして挙げ、また、宝暦4年(1754)刊<sup>しよじやくもくろく</sup>書籍目録にはこれを浄土宗に立項する。

しかるに『錦鱗鈔』の板元は並河甚三郎・八木八郎兵衛・栗山宇兵衛・荒川源兵衛・平井五郎右衛門の5書肆であり、また『<sup>わりいんちやう</sup>割印張<sup>7</sup>』享保15年の項に本書の板元を「並河甚三郎」とする。並河甚三郎についてその出版物を調査すると、日蓮宗関係書を多く手がけていることが判明した。特に注目すべきは<sup>にちだつ</sup>日達(1674-1747)の著述の板行<sup>8</sup>で、内3部については『錦鱗鈔』にも名を連ねる八木八郎兵衛との<sup>あいあいほん</sup>相合板であった。板元と日蓮宗門との関係性の深さを鑑みれば『拔萃』翻訳書の板行が成ったことを偶然の一致とは考えがたく、『錦鱗鈔』もまた日蓮宗系テキストとして出版された可能性が高い。

また『錦鱗鈔』において、序文に『勸善書』の内容について「三教ノ嘉言」を挙げる旨述べることから、鳳瑞がその体裁を把握していたことは間違いない。しかし、その目録に明らかなように、鳳瑞は7巻を因果・感応・不孝・孝行・陰徳の5部に分けて『勸善書』

<sup>5</sup> 関西大学図書館所蔵『太明仁孝皇后勸善書錦鱗鈔』(請求記号 L24\*\*5-59\*1~7)。

<sup>6</sup> 後小路薫「増訂 近世勸化本刊行略年表」(同『勸化本の研究』〔和泉書院、2010〕所収)。

<sup>7</sup> 朝倉治彦、大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』臨川書店、1993。

<sup>8</sup> 高木豊は並河甚三郎について、日蓮宗門書を多数手がけた老舗書林・村上勘兵衛の別家と指摘する(高木豊「『身延鑑』管見」、『棲神』、52号、身延山短期大学学会、1980)。

ならびに『拔萃』で用いられていた三教（儒・釈・道）の分類を採らない。分類の変容からは、『錦鱗鈔』において『勸善書』の分解が行われ、全く異なる趣旨のテキストへと改変されてしまったことが歴然としている。

上述の改変からは、日蓮宗内においてその思想的偏重により意図的に抄出された『勸善書』が『錦鱗鈔』に至って三教一致のテキストという体裁すら放棄してしまったことが明らかである。これは『拔萃』が仏書として受容されていたからというだけではなく、『錦鱗鈔』が布教のためのテキストだったことも大きな理由と目せよう。『錦鱗鈔』収録の物語はいずれにしても鳳瑞の読者たる聴衆（檀信徒）に仏の教えとして享受されねばならず、その目的のための手段として三教一致を唱える『勸善書』を活用したに過ぎない。それゆえ、本書においては三教一致の要素が無視されたのであるが、本書の例は三教一致を当然視して言及されてきた善書の受容がその実、これから乖離していたという点において興味深い。近世日本における三教一致は、例えば中野三敏が「江戸期を通じてその通俗教訓の主意となる所であった<sup>9</sup>」と述べるように、それを根幹として認識されてきたからである。

実は原典から乖離した解釈による漢籍受容というのは『錦鱗鈔』に限定されない。各宗派において、布教に際しては耳新しい漢籍の話題を自宗派に引き付けてこれを物語るが多々あった。布教の手段として用いられた漢籍故事はその性質から知識人よりはむしろ民衆に向けて直接的に伝播したと考えられる。

本発表では特に日蓮宗を介した『勸善書』の受容と民衆教化への活用例としての『錦鱗鈔』を取り上げたが。本事例は漢籍受容の一側面として評価できよう。近世期における多種多様な漢籍受容については広い視野でこれを理解する必要がある、今後更なる解明が望まれ、これについては今後の課題としたい。

〔附記〕本発表は国文学研究資料館共同研究（若手）「近世前期における和刻本仏書の研究―出版と受容に注目して―」（研究代表 木村迪子）の成果の一です。発表にあたり助言をたまわりました堀部正円先生、ならびに資料の閲覧を快諾くださいました諸機関に深謝申し上げます。

---

<sup>9</sup> 中野三敏「江戸儒学史再考―和本リテラシーの回復を願うとともに―」（『日本思想史学』40号、日本思想史学会、2008）。